

特 別 展 示

19世紀の日本と亜米利加

— 技術革新と近代外交の日々 —



万延元年の遣米使節団を乗せて太平洋を横断したポーハタン号

横須賀市自然・人文博物館

2010年9月18日～12月12日

時代の節目を考える — 開催にあたって —

1860年2月13日（安政7年1月22日）～11月10日（万延元年9月28日）にかけて、近代日本の外交団として、はじめてアメリカ合衆国の首都ワシントンを訪れた遣米使節が派遣されて150年になります。現代に続く近代外交交渉の基本が開始された意義は大きく、また日米関係にとっても記念すべき1ページでした。



村垣・新見・小栗

派遣された使節団員の内、特に首席の^{しん み ぶ ぜんのかみまさ}新見豊前守正^{おき}興を中心に、どのような人物が、いかなる環境のもとで派遣され、彼らが当時のアメリカや世界の何を見て、何を考えたかをたどってみたいと思います。そこで、新見の事跡と遣米使節団の諸事実を、当時の人々が証言した資料を基本に据えて説明をします。

そして、この企画が日米関係だけではなく、日本と世界を考える機会になることを希望します。

I 旗本新見家と幕末の三代

過去の歴史上のことだからと言って、後世の或る評者一人の言葉を鵜呑みにしてはなりません。評価は客観的でなければなりません。使節団員の一人小栗^{ただまさ}忠順（1827～68年）がそうでした。1915年（大正4年）9月27日、総理大臣大隈重信が、横須賀海軍工廠（横須賀製鉄所）創立50周年式典に寄せた祝辞により公式に小栗の功績を認め、ようやく名誉が回復されました。同様のことは、使節団首席新見正興にも言えます。

1 旗本の家・旗本の仕事

①神君家康様と新見家代々 旗本は、江戸幕府將軍直属の家臣団です。禄高1万石以下、將軍に謁見できる御目見以上の身分を言います。没後、東照^{とうしやうだいてい}大権現^{ごんげん}と祀られた初代將軍徳川家康に仕えた旗本も多く、自分たちこそ歴代將軍を支え、幕府を背負っているという自負に満ちた存在でした。したがって、神祖家康からの拝領品を大切にしました。特に、旗本新見家は、家康が1590

年（天正18年）江戸城に入る以前から手柄を立て、家康の仰せにより「しんみ」と名乗るようになったと言い、なおかつ、家紋のひとあし一葉蘆紋は家康より拝領と伝えられ、二重の意味で信頼厚い旗本でした。そのためか、天正18年に与えられた所領は明治維新まで変わることがありませんでした。

なお、旗本新見家当主は、まさかつ正勝-まさもり正盛-まさみち正道-まさとも正知-まさかず正員-まさなか正伸-まさつね正恒-まさだ正登-まさみち正路-まさおき正興-まさのり正典と続きました。

②新見家の所領 新見家は、初代正勝が相模国鎌倉郡しなの品濃村と前山田村（現横浜市戸塚区内）に250石（米の生産高で表す村高）の土地を給わりました。

その後加増されて、1625年（寛永2年）には811石5斗を知行しました。正勝は品濃村に陣屋を構えていました。現在のしらはた白旗神社境内（戸塚区品濃町518番地-7）が跡地といわれ、数百年の間、地元の方々が手厚く守ってきました。また、同所谷宿公園近くには正勝の墓も現存します。1643年



「江戸名所図会」所収品濃村

2月8日（寛永19年12月20日）没。なお、現在新見家代々の墓は願正寺（東京都中野区上高田）になっています。

幕末、新見正興の所領高は2,000石、遣米使節の功績を認められ、加増されて2,300石となりました。その頃の全所領は下記の通りです。

| | | | |
|------------|-------------|--------|----------|
| 相模国鎌倉郡品濃村 | 241石5斗 | 同郡前山田村 | 68石2斗 |
| 武蔵国入間郡下奥富村 | 584石8斗3升6合 | | |
| 武蔵国高麗郡脚折村 | 48石2斗4升5合3勺 | | |
| 武蔵国那珂郡猪俣村 | 70石9斗4升9合 | 同郡駒衣村 | 196石2斗2合 |
| 近江国蒲生郡小中村 | 520石 | | |
| 近江国滋賀郡下廻村 | 161石6斗4升 | | |

なお、1670年（寛文10年）の所領年貢率（課税率）は、品濃村77.7%、前山田村66%、小中村46.4%、下廻村53%でした。一般的に旗本領の年貢率は高いのですが、品濃・前山田両村は極端に高いようです。それを可能にしたのは、両村が東海道に面し、人や物資の往来による商売が盛んであったから

と推定されます。実際に、間口の広い茶屋・居酒屋・蕎麦屋が建ち並び、江戸へ送る魚荷物を運ぶ馬を交代させる「魚荷附馬立場」も存在しました。

③**旗本新見家の家格** 新見家が家格も高く、知行地も多い大身の旗本として活躍しはじめたのは、18世紀前半、正知の世代でした。布衣を許されると表現し、武家では狩衣装束の類型で無紋平絹の一重、撚紐の袖括をいいます。位が六位以下所用の礼服です。本来の狩衣は五位以上が用い、織紋様で絹地裏付の重ねで、組紐の袖括とします（諸大夫の格）。

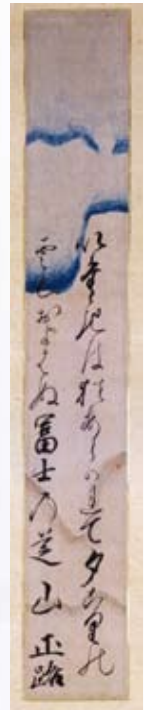
18世紀中期、正恒の時に従五位下河内守に叙任されたので、さらに家格が上がりました。家格が上昇すれば、江戸城内での席次も上がり、上位の職席にも昇れます。旗本最高の出世は、将軍側近である御側御用取次・御側衆でした。就任中は5,000石相当となりました。

2 幕末新見家三代と江戸幕府

①**将軍と御側衆・御用取次** 御側御用取次は、将軍の執務・生活空間を統括し、将軍の相談にあずかり、未決・既決の重要事項を取り次ぎ、御側衆（一般の御側衆は平御側と呼称）は、数日に一度江戸城内に宿直し、既決事項を将軍に上申しました。現代で言えば、秘書官のようなものです。将軍の日常生活の世話を焼く中奥小姓や小姓組番士・書院番士等を勤め、将軍に信任のある者が任命されたようです。

彼らの権威は高く、将軍が公式政務の場とした江戸城内の黒書院や白書院に出座される時には一緒に出てきて、老中よりも将軍に近い場所に座りました。但し、機密事項も多く、人付き合いや言動には注意深い人物が選ばれました。御側衆は複数人が常時任命され、将軍が江戸城外へ御成される時には、先行する役と同時に随行する役もあり、場合により将軍の名代も勤めた最重要役でした。

②**正路・正興・正典** 新見家で最初に御側御用取次に任命されたのは、正路（1791～1848年）でした。1831年（天保2年）西丸御用取次見習から始まり、5年後に御側御用取次に出世しました（知行1,200石加増）。前職は大坂西町奉行で、安治川河



正路和歌

口を浚渌し著名な天保山てんぼうざんを残しました。しかし、1843年（天保14年）御役御免おやくごめんを申し渡され、以後役職に就けなかったのは、同時に罷免された老中水野忠邦ただくにと血縁関係が近かったからではないかと言われます。なお、正路は賜廬文庫と名付けた私設文庫を備え、古今の貴重書を収集したことで知られ、一部は今も各地に残っています。

正路の長男・次男が早世し、三男郁三郎（正典）が幼少のため、三浦義韶よしみち（正路弟）の次男房次郎が養子となって、1848年（嘉永元年）家督を継ぎました。この人が新見豊前守正興（1822～1869年）です。



新見正興肖像

正興は1839年（天保10年）御小姓になり（諸大夫しよだいふ）、4年後に將軍の身の回りを世話する中輿小姓なかおくこしやうとなっています。さらに、1853年（嘉永6年）から十三代將軍家定の御前給仕を申し付けられているので、若い時から信頼された存在と見えます。その後、小普請組支配・小姓組番頭こぶしんぐみと出世し、1859年8月6日（安政6年7月8日）外国奉行（前年設置）となり、半月後に外国船応接役を命じられ、1ヶ月後には神奈川奉行を兼帯しました。これは欧米5ヶ国と修好通商条約を締結し、国際貿易が視野に入ってきたからで

す。そして、また半月後にはアメリカへ条約批准のため派遣されることが発令されました。翌年早々離日するまで、米英公使等と外交交渉に携わりながら、使節団の準備に追われました。

アメリカ派遣から帰国した正興は、外国奉行として外交交渉を担っていましたが、1862年（文久2年）御側衆おそばしゆうに出世しました。この年、水戸の徳川齊昭なりあき三回忌法事に十四代將軍家茂代理として遣わされ、大役を果たしています。そして翌年暮、將軍が上洛する御供の御側衆5名の内となり、大坂城では江戸城同様に宿泊御用等の御側役をこなしていました。派手ではないものの、常に將軍の手足となって奉公を重ね、1864年10月28日（元治元年9月28日）御役御免となり、菊之間縁頼詰きくのまへんがわづめとなりました。これは江戸城に出仕した時に座るべき場所を意味し、ここは大名の席次脇であり、旗本としては格式の高

い扱いです。そして、1866年（慶応2年）隠居が認められ、隠居料500俵を与えられ、正典に家督を譲ります。同日隠居を許された旗本4名は元御側衆ばかりで、亡くなった十四代将軍家茂付き御小姓の御役御免とも関係がありそうです（将軍代替わりと人員削減改革）。1869年11月21日（明治2年10月18日）没。

正典（1834～1890年）は、1857年（安政4年）中奥御番なかおくごばんを振り出しに、2年後に御小納戸、1862年（文久2年）奥小姓となり、同年暮しよだいぶに諸大夫の格（五位）に出世します（相模守）。未だ家督相続以前に養父正興同様に諸大夫となりました。学問所頭取を経て、1865年（慶応元年）御目付おめつけとなりました。新見家歴代には御目付役に就任した方も多く、人品を問われる重い役職でした。この出世は同年将軍家茂の長州進発・上洛に関わり、御目付役ながら将軍の御供や御成先へ先行御供したほか、大坂城では将軍の宿直番さえ担当していました。これは実質的な御側役といえるでしょう。反対に随行していた本来の御側役は、それらしい働きのきざしが見えなかったのです。機構改革等の影響と思われます。

③**正典と最後の将軍徳川慶喜** 1866年（慶応2年）在坂のまま死没した将軍家茂に代わり、徳川慶喜よしのぶの指示で正典は御目付川村一匡とともに故家茂遺骸通行の布達を発し、新将軍の印鑑彫刻御用等、代替わりの御用を命じられ、将軍宣下御用もこなしました。

正典は在京のまま、多忙な仕事に追われていましたが、1867年秋（慶応3年）将軍慶喜が朝廷へ大政を奉還したため、11月江戸に戻りました。その後は内外の混乱が続き、正典の動向も不明ですが、翌年正月の鳥羽・伏見の戦いに敗北した幕府は組織を縮小し、1868年3月2日（慶応4年2月9日）正典も御目付きんじなみよりあいを解かれ、勤仕並寄合となりました。他の幕臣同様に官位も返上し、登城を禁止されました。

正典は崩壊した幕府を後にし、徳川家と共に静岡に移転した後、東京に帰り、1890年（明治23年）9月26日にこの世を去りました。



新見正典肖像

Ⅱ 近代産業の進展と幕末外交団の活躍

幕末は、政治的な変動ばかりではなく、産業技術も大きく進歩した時代でした。ペリーの率いた黒船は、まさしく産業革命の申し子でした。グローバルな変化の中で、日本人は世界から多様な影響を受け、国内へそれらを持ち込みました。

1 幕末外交使節の位置付け

①万延元年遣米使節の目的 江戸幕府は、万延の遣米使節に続きヨーロッパへ外交使節を送りました。1862年（文久2年）と1863年（文久3年）に遣欧使節、1865年（慶応元年）遣仏使節、1866年（慶応2年）遣露使節、1867年（慶応3年）遣仏使節が、相次いで派遣されました。したがって、幕末外交の流れの中で遣米使節が果たした先駆的役割は、大きく評価されなければなりません。但し、通り一遍の視察であったかどうか、外交成果が国内外にどのように役立てられたかが、評価の分かれ目となるでしょう。

一般的に国家（国際法主体）間で成立した合意を「条約」と呼び、条約締結手続きは、全権代表の選任、当事国の交渉、署名および批准手続きを経て成立します。1858年7月29日（安政5年6月29日）日米修好通商条約および貿易章程が、幕府とアメリカ合衆国全権代表タウンゼント・ハリスの間で署名されました。1859年7月4日から函館・下田港以外に、横浜・長崎が開港されると記載されています（新潟・兵庫は後日）。この条約を批准すること



大統領に謁見する使節代表

が日米間で話し合われ、最終的に1860年2月（安政7年正月）、アメリカ側が用意した軍艦ポーハタン号に乗船して渡米しました。なお、幕府軍艦咸臨丸は、使節警護船として訓練航海を兼ねてサンフランシスコまで随行したのです。

②構成員 使節団員は、首席（正使）・次席（副使）・監察役（目付）以下、従者も含めて合計77名でした。

正使 新見正興（外国奉行兼神奈川奉行）40歳 従者 9名

副使 村垣範正（外国奉行兼神奈川奉行・箱館奉行）48歳 従者 9名

監察 小栗忠順（目付）32歳 従者 9名

勘定方 森田清行（勘定組頭）49歳・益頭尚俊（勘定組頭支配普請役）32歳・

辻信明（勘定組頭支配普請役）30歳 従者 7名

外国方 成瀬正典（外国奉行支配組頭）39歳・塚原昌義（外国奉行支配調

役）36歳・吉田久道（外国奉行支配定役）40歳・松本春房（外国奉行支配定

役）30歳 従者 7名

目付方 日高為善（御徒目付）24歳・刑部政好（御徒目付）37歳・栗島重全

（御小人目付）49歳・塩沢彦八郎（御小人目付）34歳 従者 6名

通弁方（通訳） 名村元度（箱館奉行支配定役格通詞）34歳・立石長久（阿

蘭陀通詞）32歳・立石教之（通詞見習、斧次郎）17歳 従者 1名

医師 宮崎正義（寄合医師）34歳・村山淳（御番医師）32歳・川崎勤（肥前

佐賀鍋島家医師）30歳 従者 3名

賄方 山本喜三郎（外国方御用達伊勢屋平作手代）49歳・加藤素毛（飛騨益

田郡出身）35歳・佐藤秀長（豊後杵

築松平家来）37歳・飯野文蔵（江戸

出身）35歳 使用人 2名



前左より新見・小栗・村垣

日本の武家社会では相奉行と称

し、同一職務に複数人員を配置する

ことが伝統的に行われました。たと

えば、全く同じ組織だった江戸町奉

行には南・北両奉行が置かれたよう

な事例です。この使節Embassyの

場合も、国際的には両者をprimary

とsecondaryと翻訳できますが、幕

府にとっては両者同一です。但し、

小栗忠順の「目付」の立場は理解し

がたいものです。同列の監査役です。

幕府で言えば、勘定奉行所のNo.2勘

定吟味役のような存在です。地位は次席ですが、上席の勘定奉行に対して、拒否権を執行できたのです。このように、合議制と監査制度を組み合わせ、不正を防止しました。

③訪問先と世界周航コース おおよその訪問地を示しておきます。

1860年2月9日ポーハタン号で品川を出港し、横浜港へ。13日横浜出港。(23日日付変更線を通過) ※途中荒天によりホノルル寄港に変更。

3月5日ハワイ諸島のホノルル到着。後日、ハワイ国王に謁見。18日出港。

3月29日サンフランシスコ到着、メア島に移動。4月7日出港。

4月24日中米のパナマ到着。翌日下船し、パナマ鉄道で大西洋岸のアスピンウォールへ移動し、迎え船ロアノーク号に乗船。26日出港。

5月14日ワシントン海軍造船所に到着。

5月17日ホワイトハウスで大統領ジェームズ・ブカナンに謁見し、將軍よりの親書を捧呈。後日国務省でカス長官と日米修好通商条約批准書を交換。

6月5日使節はホワイトハウスに大統領を訪ね、暇乞い。大統領は三使に金メダルを贈る。国務省で長官より將軍への親書(返書翰)を受け取る。

6月8日ワシントンからボルチモアへ移動。翌日フィラデルフィアへ移る。

6月16日ニューヨークへ、29日帰国船のアメリカ海軍ナイアガラ号に乗船し、30日ニューヨークを出港。

7月16日カーボベルデ諸島ポルトガル領ポート・グランデに寄港。

8月6日アフリカのロアンダ(Loando羅安多)に寄港。26日喜望峰を通過。

9月30日インドネシアのバタビアに寄港。

10月22日香港に寄港。



帰国船ナイアガラ号

11月8日三浦半島松輪村沖の海上に碇泊、翌日横浜港で従者等を下船させ、品川沖に碇泊。

11月10日使節団は築地操練所に上陸して、一時帰宅。大統領の親書は新見の屋敷で一晩保管。

11月11日將軍徳川家茂に拝謁して、復命しました。

結果的に、世界一周をすることになった遣米使節団ですが、現代の旅行と事情が全く違い、途中で生命の危険を感じることもありました。往路では、冬の北太平洋の荒波に襲われ、予定を変更して食料・燃料補給と船体修理のため、ハワイに立ち寄りました。復路では、アフリカ西岸航行中に食料と水が不足し、燃料の石炭も底を突いたため、しばらく帆走する事態にまで陥りました。最新式蒸気船も石炭や水がなければ、役に立ちません。周航途中で石炭を積み込む作業は最優先でした。これは、ペリーが日本に開港を求めた理由の本質でもあったのです。

2 遣米使節団と近代産業への眼差し

①**多様な視察先** 遣米使節団は旅行途中でもさまざまな体験をしました。それは個人にとっても、幕府や日本という国にとっても貴重な経験でした。ここでは、アメリカでの視察先を見ておきましょう。



ホワイトハウスでの園遊会

第一にホワイトハウス。次いで国務省・議会です。合衆国の政治制度や政財界の様子は、当時の日本とは異次元と言えるほどです。フランクな大統領の態度、歓迎晩餐会（バンケット）で婦人達と席に着き、園遊会で男女のダンスに目を白黒させました。

遣米使節の実質的目的に国内の金融問題がありました。日本の金銀交換比率が国際価格と大きく異なっていたため、貿易により金が流出する事態になっていたのです。アメリカ本国まで出かけて、造幣局で実際に日米の金銀貨の含有率を分析することが眼目でした。フィラデルフィアの造幣局に使節団要人が出かけて分析に立ち会ったり、反対に局責任者がホテルまで出向いて何度も説明をしたりと、非常に大きな問題でした。アメリカ政府より公式な分析結果を受け取り、金銀の国際的重量交換比率は金1：銀15～16程度なので、日本国内でもそれに見合った貨幣改鑄をすればいいかと、と示唆を受けました。使節帰国後にはこれらも上申していますが、既に万延の貨

幣改鑄が実施される予定でした。

その他、造船所・天文台・税関・測量局・博物館・図書館・教会・病院・印刷工場・砂糖工場・農場と、実に多様な場所を見学していました。もっとも、身分制度の厳しい時代ですから、首席達と従者達では実際に出かける場所が異なり、服装も違いました。但し、誰にでも一番興味深い場所は、ホテルだったのかも知れません。

②**勘定組頭森田清行の眼力** 勘定所のエキスパートであった森田岡太郎清行(1813～61年)が、実に興味深い見聞と考察を日記に残したので、彼の目を通して1860年の世界を見てみます。まず、世にも珍しい中米産ホタルを紹介しましょう。パナマに到着した夜、船室の窓からホタルが一匹入ってきたので、それを捕らえてハワイなどで採集した押し花とともに、紙に包んで残しておきました。150年前のホタルの残骸を調べると、確かに中米に生息する種類であることがわかりました。昆虫学の世界では、これは稀有のことです。

また、ポーハタン号の士官で貨幣掛だったギャラガー (B.E.Gallagher) が、



森田清行

商人になって横浜で商売をすると申し出ていました。彼は、350トン積の船をサンフランシスコで雇い、神奈川港まで往復6ヶ月の船賃5,000ドル(3,750両)の経費を払っても儲けがあるので、350トン積の船2艘で水油(菜種油)と生糸を仕込みたいと話していました。これを聞いて森田は、日本国内の物価が騰貴すると知るべきと述べています。実際に、開港後に物価騰貴・物資欠乏が発生し、幕府は雑穀・呉服(絹製品)・糸・水油(菜種油)・蠟の「五品江戸廻し令」を発令しなければならなくなりました。

なおまた、サンフランシスコ到着後、横浜で在留アメリカ人の生活費は1日金2朱づつに対し、本土では3ドルが必要となるので、金1両=4米ドル金貨(金1分対1米ドル)の換算比率ではないかと、既に推定していました。この推測がかなり正確であったことは、アメリカ側より示された正式な日米金銀貨分析結果報告では、「90セントと安政の新壱分金、あるいは3ドル60

セントと新小判1両が現況の交換比率である」と説明した事実からも証明できます。

森田は、行く先々で米値段や菜種油の物価情報を収集し、国産白米を相手に見せてどのくらいで売れるかと聞いたのです。このような地味な活動が、訪米に浮かれるアメリカ本土の現状を正確に記録して、日本へもたらすことになったのです。

③その成果と横須賀製鉄所・造船所 使節団は、アメリカより帰国直前のニューヨーク滞在中に、しきりに造船所近辺での滞在を希望する申し入れをしました（森田清行「亜行船中并彼地一件」所収）。その中で、明確に「第一吾邦当今之急務は海軍を開くにあれば、ネヒヤールト（Navy yard・海軍造船所）に滞留いたし候節は、自然器械の工用を熟視し、帰国の上、大に益あらんと思へハ也」と、日本で海軍を整備するため、アメリカの海軍造船所に滞在し、機械の運用をよく見学すれば、帰国後、大いに役立つでしょうと表明しています。外交上の主目的以外に、国内事情から必要だったのは、1860年には既に、海軍そして造船所であったことは明白です。

すると、この5年後に横須賀製鉄所（明治4年造船所と改称）が起工されたのは、遣米使節段階からの既定路線だったのです。但し、それがアメリカの技術と指導を仰がなかったのは、周知のように1861～65年まで南北戦争



ワシントン造船所で記念撮影・加用家蔵

が起こって、アメリカは国内問題で手が回らなかったからです。遣米使節派遣の意義を、単なる外交上のお祭りのようにとらえることは、正しくありません。何を見て、何を考え、次に活かしたかが問われるのです。

なお、幕府がオランダに建造を依頼した蒸気船と、留学生は当初アメリカに派遣する予定でした。また、団員の益頭尚俊は、1865年より横須賀製鉄所建設担当となり、維新政府引継ぎ時まで現地に滞在しました。

3 浦賀湊と幕府海軍の群像

江戸幕府は、1855年（安政2年）から長崎海軍伝習所を開き、海軍の士官以下の教育を始めました（浦賀から与力・同心10名）。4年後、軍艦奉行を置き（2,000石高、外国奉行次席）、永井尚志・水野忠徳（当初彼らを遣米使節に予定）、そして井上清直が相次いで任命されました。いずれも開明派と思われた人達です。遣米使節警護船の提督木村喜毅も渡米直前奉行に任命さ



飯塚玲二画成臨丸・佐々木家蔵

れました。木村が1863年11月7日（文久3年9月26日）まで勤めた間に、軍艦頭取（100・200俵高）も置かれましたが、海軍組織が本格的に整備されたのは、1865年8月28日（慶応元年7月8日）海軍奉行（5,000石高、陸軍奉行の上席）設置からでした。築地操練所を拠点とし、浦賀湊は補給・修理場所となりました。また、浦賀奉行配下の与力・同心から海軍関係に転任する人材も多数存在しました。

以下に、木村喜毅日記に見える関係者を何名か紹介します。

①成臨丸乗船者 浦賀の与力・同心では、佐々倉桐太郎義行（1830～75、軍艦役・維新後海軍兵学寮勤務）・浜口興右衛門英幹（後述）・山本金次郎（～1864、軍艦組出役）・岡田井蔵（1837～1894、軍艦操練所・横須賀製鉄所に出仕）が知られます。

なお、幕末に浦賀で幕府軍艦が修理され始めたのは、1861年（文久元年）のことで朝陽丸でした。木村喜毅はその検査に訪れていました。

②中島三郎助永胤（1830～1869）浦賀の与力中島永胤は、佐々倉義行とともに1868年2月15日（慶応4年1月22日）軍艦組となりますが、榎本武揚等に合流し、函館五稜郭の戦いで息子恒太郎・英次郎とともに戦死しました。後年、浦賀の愛宕山に建てられた顕彰碑には、多数の方々の寄付があり、その人柄を偲ばせます。

③浜口興右衛門英幹（1829～1894）軍艦操練所教授方出役であった浜口は、明治維新とともに一時隠棲しますが、1870年（明治3年）横須賀製鉄所の技術士官として再度出仕し、造船分野で活躍しました（少技監）。

このように、遣米使節や幕末の海軍の中から、明治維新後に政財界を含め各界で活躍する人材が輩出しました。他方、志半ばで客死した人も多かったのも事実です。

Ⅲ 友好のしるし



創建当初のペリー上陸記念碑

1860年遣米使節団の渡米から始まった日米の交流は、幕末に一時停滞したとは言っても、明治時代には民間人の往来が増加し、政財界の交流も盛んになりました。一方では、アメリカ本土で日系移民が多数活動する時代ともなり、移民排斥運動で日米関係が緊迫したこともありました。その中で、1901年（明治34年）、米友協会（会長金子堅太郎）によって建設されたペリー上陸記念碑（横須賀市久里浜7丁目に所在）は、日米の相互理解を深めるために、両国関係者が多大な努力をした結晶です。会員の一人米山梅

吉は、若い頃アメリカの大学で学び、日本で最初にペリーの伝記を書き、経済界に大きな足跡を残した方です。

また、20世紀前半に日米は敵対することもありましたが、1953年ペリー来航100周年の際には、両国が官民そろって祝賀行事をおこなったことを記憶している方も多いと思います。そして、ペリー来航150周年に続き、遣米使節派遣150周年を迎えた21世紀、過去の事実学びつつ、一層の友好関係を考える段階となりました。

使節団は、何を見て、何を考えた？

◆初めて経験する長期遠洋航海 現在でも同様ですが、航海中は乗船する船の船長の指示に従わなければなりません。帰国のナイアガラ号上でも、発火品持込厳禁、部屋で茶を沸かすことも厳禁との通達がありました。特別に新見・村垣・小栗は蠟燭で煙草を吸うことを許可されました。後に彼らのみ用火（炭の火種）が許可されました。また、役人の船室は夜10時消灯、喫煙も

10時まで。従者は船室内で裸蠟燭厳禁、雨天以外は部屋内で煙草厳禁、航海中は風下で喫煙、港内では船の左舷で喫煙すること。実に厳格な旅でした。

◆**水は1日に1人1ガロン支給!** 水がなくては生きてはゆけません。船中では1人1日1ガロン(3.78リットル)の水が配給されました。ところが、帰路アフリカのロアンダにたどり着く前には飲料水が枯渇し、0.5ガロンに減らされました。どうもアメリカ人水兵達はそれにも届かないほどだったようです。

◆**味噌・醤油を持参** 船内で日本人の食事は、御用達山本喜三郎等賄い人と使用人の半次郎(航海途中死去)と鉄五郎がまとめて調理していました。しかも、森田清行の日記和暦5月22日条によると、食料品は船長より山本が受領し調理しましたが、この晩より米を受け取って、米飯のみ当方(日本人主従)で仕立て、その他をアメリカ人へ依頼すると評決したとあります。これは帰途直後には味噌・醤油が底をつき始めたための処置と思われます。その原因は、渡米前に勘定方の森田が予定した積み込み量を半減させられたため不足したので、担当者であった森田は不満を漏らしたのです。



ホテルで自炊する従者達

◆**ボストンの製氷工場は全米唯一!**

1860年のアメリカでは、製氷工場がボストンにただ一つしかありません。使節団はワシントンに上陸し、ホテルで昼食を取った時に、「氷製ノ菓子」を口にしました。これは感激ものだったらしく、詳しく説明をしています。ホテルで出される氷にも目を止めるほどでしたが、驚くことにアフリカのロアンダにも氷売りがいて、それはボストンから船で運ぶと記録しています。

◆**大統領に謁見した時の服装は何?** アメリカ人が着物を着た日本人の行列を見た時の驚きは、想像するだけでも面白いものですが、実際に大統領に謁見した時の服装がわかります。首席新見・次席村垣と監察役小栗は狩衣かりぎぬを着しはいとう佩刀していました。第4位の勘定組頭森田は布衣ほい、外国方組頭成瀬正典は仮布衣まきのり、外国調役・御勘定格と御徒目付は素襖すおう、御小人目付は髪斗目麻袴のしめといういでたちでした。成瀬が仮布衣であったのは、將軍の親書を彼が持ってホワイトハウスへ車列の先頭を歩き、なおかつ大統領の前まで持って行った

からです。但し、謁見には首席から御勘定格御徒目付と通詞（通訳）の5名しか許されなかったのです。

なお、大統領主催歓迎会の際には紋付・羽織・小袴で出席。

◆**団員は仲良くしたり、ぶつかったり！** 世界周航中、団員は和気あいあいだったかという点、事実は身分制ゆえに気まずい時もありました。反対に、小栗と森田は意見の対立もありましたが、金銭出入簿を見ると、2人で布地を購入して折半したのではないかと推定される記述もあります。

◆**アメリカの光と影！** 渡米中、アメリカ本土には黒人が多数生活し、その社会的地位についても観察しています。また、帰途アフリカのロアンダで奴隷売買を実見し、1人10～20ドルで売買され、アメリカへ供給されていたと記しています。このような影の部分にも注目し、アメリカからヨーロッパへの輸出品が綿や小麦であり、流行の婦人服はフランスからもたらされていたことも聞いていました。

◆**幕府の旅行用意金と個人の準備金** 幕府は、使節団に対して金61,130両（78,111メキシコドル）を準備して持参させました。さらに、使節団員自身が3,000両余を自分で用意していたのです。咸臨丸の木村喜毅も個人で3,000両も工面しましたが、首席の新見も渡米直前に、用人が所領の村名主にアメリカへ「土産」に持って行く小判が江戸にないので、そちらで両替して送ってくれるようにと手紙を書きました。既に日本国内では金貨が不足した事実



メキシコドル貨の印影

を示すとともに、みな準備には大変苦労したのです。

さて、この幕府資金の扱いをめぐっては使節団の中で軋轢もありましたが、一番興味深いのは滞在中の経費（約10万ドル）をほとんどアメリカ側が負担してくれたことでしょう。

●**同時代の記録に注目** 上記の記事は使節団の体験のごく一部です。詳細は、彼らが残した記録と公文書を参照して下さい。但し、各々の視線の位置が異なります。身分制度の時代であることを前提に解釈して下さい。

最後になりましたが、この企画を実施するにあたり、資料所蔵者ならびに関係各位に多大なご協力を賜りました。厚くお礼を申し上げます。